

野田宇太郎文学散歩

第11卷

文一総合出版

著者略歴 明治42年(1909)10月、福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念、久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで、出版編集に携わる。その間、雑誌『文藝』、つづいて『藝林閑歩』の編集責任者となり、以後、著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他、全詩集『夜の蜩』、近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』、木下杢太郎研究『きしのあかしや』、近代詩史『詩人と詩集』、キリシタン史『少年使節』、紀行随筆『日本の旅路』、戦中記録『灰の季節』、戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年、第1回九州文学賞(詩)受賞、昭和50(1975)年度芸術選奨文部大臣賞受賞、昭和52(1977)年、第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩 11

東海文学散歩 海道篇 上

昭和53年6月10日 初版第1刷発行

著者 野田宇太郎

発行者 佐藤 弘一

発行所 株式会社 文一総合出版 東京都千代田区神田神保町1-32
電話東京(291)8049 振替東京2-42149

©1978 0395-90111-7354
定価は、函・帯に表示してあります。

印刷・製本 奥村印刷

目次

東海道

清水・興津・富士山麓

清水へのいざない 三保の羽衣 高山樗牛の墓 興津

清見寺と樗牛 若き藤村と五百羅漢 天田五郎と次郎長

梅蔭寺にて 壮土墓 富士山麓の次郎長開墾地

静岡

久能山と静岡 登呂 駿府城下町 鷹匠町と蒲原有明

賤機山 安倍川 鞠子にて 吐月峰柴屋寺

東海道の川と山坂

大井川 小夜の中山

焼津（神様の村）

大崩海岸にて 八雲と焼津 乙吉の家 防潮堤にて

八雲の床屋 乙吉の墓 天野甚助の板子 節子夫人の手

紙

六

七

八

九

渥美半島

田 原

二三

田原街道 巴江城址―三宅氏と渡邊華山 華山の藝術と遺

書―華山文庫にて 藩費成章館と華山 仲小路の武家屋

敷 華山終焉の家にて 華山の墓 句碑と墓石と

伊良湖岬まで

一九

芭蕉の旅 杜國の墓 松岡國男の旅 磯丸と呪禁歌

糟谷家にて 磯丸の墓 「鷹一つ」の句碑 「椰子の実」の

渚 「伊良虞島」―岬にて 片浜十三里

三河沿岸

二〇三

豊橋 吉良

東海文学散歩 海道篇上 おぼえがき

『東海文学散歩』全三巻のうち本巻はその第一巻である。昭和三十七年十一月から翌三十八年四月に及ぶ第一回踏査に、昭和三十九年の補遺踏査を加えて書き下ろした原稿を基本として、それに必要な増補改訂を徹底的におこなった。その後東海道新幹線開通などにより東海地方は都市造成の津波に襲われ、歴史的な自然の破壊、変貌が著しく、昨日まで在るべき所に在ったものが今日はいく姿を消すというような事態も珍らしいことではなくなった。その在るべき所に在った状態を未来のために記録しておくのも文学散歩の使命であることはいうまでもない。その後の変化には可能な限りの註記をほどこした。なお、本巻の最終章「三河沿岸」は、内容の関係から特に昭和五十一年現在の記録として書き下したものである。

(著者)

東海文學散步

海道篇 上

東
海
道

清水・興津・富士山麓

清水へのいざない

清水市といえ、高山樗牛の墓が龍華寺に在り、その樗牛の晩年にゆかり深い興津も、今では市に合併されているし、また古来から羽衣伝説と共に風光明媚で知られている三保の松原などもあって、話題も豊富である。

それだけでも清水は文学的な都会のように思われるが、実際に今の清水を訪れる観光客の目的といえ、市街の西に小高くわだかまる日本平や、その南海岸に突出して今は静岡市内になっている久能山の東照宮を訪れ、ついでに梅蔭寺の清水次郎長一家の墓を見て、浪花節的思い出にでもひたり、金之餘れば三保の松原の観光旅館にでも泊ろうか、という程度で、樗牛の墓に詣でる人ともなれば、それはもう特殊な観光客ということになる。そうした一般観光客で騒がしい所へはあまり行きたくないわ

たくしは、羽衣伝説の三保や龍華寺の樗牛の墓にはつねに旅心を唆られながらも、なかなか腰をあげる機会もなかった。

ところが戦後になって、わたくしは明治の歌人でもあった禅僧の天田愚庵のことに関心を持つようになり、機会があれば、愚庵が若き日に清水次郎長の養子になり、次郎長に代って開墾事業の指揮まですした富士山麓の大淵村も調べたいと思うようになった。また愚庵の『東海遊俠伝』を読んでからは、人間次郎長の生涯の姿も変った。それまでのわたくしは、恥ずかしいことながら次郎長を海道一の大親分としてしか知らず、またその生涯を真剣に考えようとしなかった。だが愚庵の人間像を調べるにつれて、次郎長はわたくしの前に意外にも社会事業家としての姿をあらわすようになった。明治という時代の認識のためにもそれを知りたいと思いはじめた。

たといそこに高山樗牛の生涯との関係や三保の松原がなくても、次郎長を生んだ清水へは行こう。そう思い立つとわたくしの胸は悸めいた。——こうして、わたくしが清水の海辺に立つことになったのも、もとはといえば天田愚庵のいざないによる、と云ってもよい。

三保の羽衣

清水市に着いたのは秋の日のたそがれ時だった。世話する人があって宿は三保にとってあった。三保の宿といえば聞えはよいが、今は海岸に工業地帯がひろがっていて、観光団体などを相手にする宿

である。騒がしい酔っ払いや、窓の下を夜通し走る貨物自動車のひしめきや、近くの高産物工場から流れてくる異臭で、ゆっくり眠ることも出来ない始末。それでも旅の疲れで夜更けてとろとろとまどろんだ。

けたたましい犬の鳴声ですぐ眼を覚して時計を見ると、もう五時である。まだ夜明けには少し早いが、海岸の陽の出をみることにして、宿を出た。工場などの立ち並ぶバス通りから、岬に向って右へ折れると、まもなく松原になり、やがて渚になる。宿を出る頃はまだ夜だったのに、砂利を踏み、白砂に靴をめりこませながら、波音をたよりに渚に出た頃は、どうやらあたりが白みかけて、大分時間も経ったことを知った。

三保は御穂、即ちその穂の字は海に突きでた場所の意味でもあるらしい。岬の突端に燈台の光がざらりざらりと回転している。富士山はその向うになる筈だ。

海にはもう船が走っていた。ただその船影は黒い幻のようにしか見えないが、東の空のどこかでもう太陽の芽は萌え出しはじめているらしい。この三保の松原の東方は海を隔てて伊豆半島である。三保の朝陽は水平線ではなく伊豆半島の上から現われる筈だが、水平線上は雲が厚く流れている。朝陽の便りは先ず聳えている筈の富士の片肌を染めるに違いないと思いつながらはるかな岬の天を仰いだとき、中空に薄桃色の影がちらりと動いた。雲にしては明る過ぎる時間だし、おや、と思った次の瞬間には、それが雪を冠った富士山頂の東側の一角だと気付いた。

富士は見るみるその形をはっきりと中空に現して行った。時計の秒針が刻々と移るように、華麗に

輝き出す。……もう朝である。三保の松原の夜明けである。わたくしは明けゆく富士の姿をカラーフィルムに収めた。幾枚も幾枚も……。

へあれ天人は羽衣の

舞をまひまひかへりゆく

風にたもとがひらひらと

羽根に朝日がきらきらと

松原こえて大空の

かすみに消えてのぼりゆく……

小学生の頃に習い覚えたなつかしい「羽衣」の唱歌が、思わずわたくしの唇を動かそうとした。

白々と夜の明けた海岸には海蝕に対する突堤工事が行われているらしく、あちこち破壊の跡がつぎつぎに朝日に照らし出されて行った。自然はここでも毀されつづけているのである。朝富士の姿を背にして、大きな松の木の見える松原の方へ歩きながら、そういえば、天人が羽衣をかけたという伝説の衣掛けの松は、もう海中に没したという話をきいたことがあるのを思いだした。

ようやくわたくしは渚からゆるやかな砂丘を登って老松の生い茂る松原に入った。海に面した松の根方に、小さい石の祠の羽車神社というのがあり、その脇に「羽衣祠碑」が古呆けて立っているが、

この碑は享和三年夏につくられていたのが痛んだので、明治四十四年に再建されたことが碑陰に刻まれている。「羽衣天女祠再建記」という碑陰の刻文を読むと、「後龜山天皇ノ御宇、結崎世阿彌羽衣謡曲ヲ作ル、此ヨリ羽衣天女ノ事頗ル人口ニ膾炙スル所トナル、其後駿府尹牧野成傑、夙ニ其ノ湮滅ニ蹤帰スルヲ慨キ、中島漁ヲシテ略記セシム……」（原、漢文）とある。

天人物の謡曲はこの世阿彌（結崎左衛門太夫元清）の「羽衣」のほかに、『源平盛衰記』巻一の「五節始」などに伝えられた五節舞の故事によったと思われる「吉野天人」などがあるが、天人物の根源は白鳥処女説話といわれる伝説で、世阿彌の「羽衣」がもっとも謡曲としてはすぐれたものとされている。またその他に新らしいものでは長唄常磐津掛合いの所作事「羽衣」（明治三十一年初演）などもあり、この天人物は次第に人口に膾炙されて行ったことが知られる。

駿河国三保の松原にむかし白龍（または柏梁）という漁師が住んでいた。ある日、浦の景色を眺めていると、磯の松の枝に美しい羽衣が掛かっていたので、それを持ち帰ろうとする。そこへ天人が現れて、それは妾の羽衣だから返して下さいと哀願する。白龍は羽衣ときいていよいよ喜び、それならば国の宝にしようと云って返そうとしない。天人は羽衣がなくては天にかえれないので嘆く。その姿を哀れんだ白龍は、天人の舞姿をみせて呉れるならこの羽衣はお返ししてもよいという。天人はしかたなく舞をまいながら、天に消えて行った。……その伝説の舞が駿河舞といわれるものである。

世阿彌の謡曲では天人がシテ、白龍がワキである。白龍という名からも、それが大陸渡来の伝説であることは想像に難くない。この話は『駿河国風土記』にあるので、謡曲もそれから発案されたのだ

ろうといわれる。

民俗学者柳田國男によると、これに類する伝説はまだ日本の各地に散在していて、「天人女房」という天人童話の形にもなっていて、沖繩や喜界島あたりでは羽衣のことを飛衣とびぎぬと云い伝えているのである。天人が地上の男の妻となってその間に子が生れる形式が多いが、「羽衣」にはただ形見に美しい舞だけをのこして上天するという清純さがある。なお柳田國男は三保の伝説について「富士の山麓を中心として、夙く發達してゐた驚姫の物語、即ち竹を伐り箕を作つて世を渡る貧しい老人二人が、一朝に神女を得て家豊み栄えたといふことなども、後にその美人が飛んで空に昇つたといふことを結末にしてゐるのを見ると、同じく又異界交通の神話の名残で、その子孫後裔と称する家々のみは、久しくこれが我が家の由来を貴くする伝説として守り、又正式に語らせてゐたものと思ふ。もし然りとすれば、その名山の裾を洗ふ三保の海ばたを舞台として、羽衣の謡の曲が新たに設けられたのも、基くところは遠く久しかつたもので、現にその詞章の中に援用せられる東遊びの駿河舞なるものも、やはり又人間との縁を全うして、本の国に還つて行く神の妻の縹渺として霞の空に消え去つたなつかしさを、舞の姿によつて写し残さうとしたものと想像しても、大なる誤りはなささうである。」

（新潮社版『日本文学大辞典』と述べている。……）

わたくしは松原から海を眺め、天人伝説の思いにふけりながら、さつき暁闇の中に仰いだ夢幻のような朝富士の片影を思いかえした。あの光りが中空に浮んだ天人の羽衣になったのではなかったろうか。ふとそんな気がしたのである。……少しまた渚の方へ戻つて天を仰ぐと、すっかり明るくなった